

モンゴル人医学者たちの文化大革命：  
「日本」を背負わされた知識人たち  
(中国文化大革命と国際社会：50年後の省察と展望：  
国際社会と中国文化大革命：  
フロンティアの中国文化大革命)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ハスチムガ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009407">https://doi.org/10.14945/00009407</a>

# モンゴル人医学者たちの文化大革命 —「日本」を背負わされた知識人たち—

ハスチムガ

## はじめに

小論は、日本から近代的な医学の知識を学んだモンゴル人医学者たちの人生史に焦点を当て、激動の時代を生きたモンゴル人の苦難に満ちた社会活動と医学的な実践を紹介する。モンゴル人のライフ・ヒストリーを通して、20世紀における南モンゴルこと内モンゴル自治区のモンゴル人社会の変遷の一端を明らかにしたい。

モンゴル人にとっての20世紀前半は、民族自決のために戦った時代である。いち早く独立を宣言した北モンゴルは1924年から社会主義の建設を始めた。南モンゴルでは、民族自決を目指したモンゴル人青年たちが近代的な知識を学ぼうとして日本やソ連に渡り、民族の統一を目指して奮闘した。しかし、こうした理想も日本の敗戦後に大国同士で勝手に結んだ「ヤルタ協定」によって葬りさられた<sup>1)</sup>。それ以来、モンゴル人は複数の国に分断され、それぞれの「社会主義を建設」することを余儀なくされた。

南モンゴルでは、1945年10月にウラーンフーの主導で「内モンゴル自治運動連合会」が組織され、やがて同地域は中国共産党に接収された。外部の力による強制的な変革の中で、民族統一を目指した青年たちは中国共産党に参加し、官僚になり、南モンゴルの社会主義建設にかかわるよう変化した。1966年5月から1976年10月まで、およそ10年間にわたる文化大革命（以下、文革と略す）の嵐の中で、346,000人が逮捕され、27,900人が殺害され、120,000人が暴力を受けて身体障害者となった<sup>2)</sup>。本研究で以下に扱う高海川とホルチン（ホルチンビリクともいう）、それにジュテークチらはまさにそのような時代を生きた証人たちである。これらの3人はいずれも日本的な近代医学の訓練を受けており、その日本的な知識を駆使して南モンゴルの近代化に貢献した。しかし、彼らは日本とかかわったがゆえに文革中に批判闘争された。小論では彼らのラストヒストリーを通じて、内モンゴルの衛生医療業界における文化大革命の実態を示しておきたい。

---

<sup>1)</sup> 楊海英編『中央ユーラシアにおける牧畜文明の変遷と社会主義』「満洲国の「赤い靴をはいた」少女—あるモンゴル人女性のラストヒストリー—」名古屋大学文学研究科、2014年、40頁。

<sup>2)</sup> 文化大革命については郝維民『内モン古自治区史』内蒙古大学出版社、1991年313-314頁参照。楊海英『墓標なき草原（上、下）』岩波書店、2009年は数多くの証言を記録している。また、本書所収の哈日巴拉論文にも詳しい論考がある。

## 1 日本の医学を学んだモンゴル人—高海川

高海川は1939年にハルビン陸軍軍医学校に興安軍官学校<sup>3)</sup>から転入学し、5年間学んだ。彼には財団法人・蒙民厚生会から学費が支給されていた。学校の公用語は日本語で、一クラスに40人の生徒がいた。日本人8人で、朝鮮人は1人、モンゴル人は6人で、そして中国人が25人と最も多かった。1943年7月に、高海川はトップの成績でハルビン軍医学校を卒業して興安軍官学校に戻った。興安警備軍第二師団の歩兵第三十八団（連隊）に上尉医官として任官した。

日本の敗戦後に南モンゴルと満洲に進出した中国共産党は民族主義的な思想を持つモンゴル人青年将校たちを騎兵師団から追放し肅清をくりかえしながらも、満洲国時代の人材を残して活用した。特に軍医が不足していたので、高海川も「監視しながら使用可能な者」として、共産党の支配地に派遣された。中華人民共和国が成立した後の1950年春、高海川は人民解放軍に名を変えていたモンゴル軍から除隊となり、内モンゴル自治区西部にある包頭市に設置されたばかりの衛生学校の校長として働くことになった。中国文化大革命中が勃発すると、彼はその経歴が問題視されて、学生たちからの暴力を受けた<sup>4)</sup>。

ハルビン陸軍軍医学校は日本の軍隊における本格的な軍医を育成する教育機関である。ハルビン陸軍軍医学校だけでなく、南満洲医科大学でもモンゴル人たちが学んでいた。帝国日本は軍医学校を卒業した医者たちを植民地統治にも活用したし、彼らもまた数多くの病院や医学校の建設にかかわっていた。いわば、満洲や南モンゴルにおける衛生医療の近代化を担う人材となったのである。

## 2 モンゴル人医学者ホルチン

### 近代化の先駆け

ここでまずホルチンという医学者を紹介したい。

ホルチンについては、文革中に主に『内蒙古自治区直属機関宣教口「魯迅兵団」・「衛生総部」内蒙古衛生庁「318」兵団』が1967年9月に発行した批判資料を用いて考察を進めたい。批判文章である以上、一部の評価は当時の政治的な必要性から書かれたかもしれない。しかし、このような批判文章を利用することによってホルチン氏の生涯の経歴を確認することもできよう。情報公開が遅れている中国において、批判資料も貴重な第一次史料である。

---

<sup>3)</sup> 興安軍官学校については、楊海英著『日本陸軍とモンゴル—興安軍官学校の知られざる戦い』（中公新書、2015年）参照。

<sup>4)</sup> 楊海英『チベットに舞う日本刀—モンゴル騎兵の現代史』文芸春秋、2014年、117～132頁。

ホルチンはモンゴル人男性で、1916年にウランチャブ盟ウラト西公旗のメルゲン・スム（寺）近くに生まれている。1934年8月に地元の三公小学校を卒業してから、国民党政治学校包頭分校に入った。包頭政治学校を出てからは、徳王政権がベイス・スム（百霊廟）に設置した学校で一時的に教鞭を執り、後に優秀な人材として選ばれて日本に留学した。1937年4月から善隣高商特設予科で一年間日本語を学んだ後に東京医学専門学校に進学し、1942年に卒業後に故郷に帰っている<sup>5)</sup>。

その後、モンゴル自治邦中央医学院附属医院で技術担当となり、同時にモンゴル自治邦保健所所長のポストについた<sup>6)</sup>。1944年8月14日にデリゲルチョクトという人物が主導して「内モンゴルを解放し、南モンゴルと北モンゴルを合併」させる目的で「内モンゴル青年革命党」が創立されると、ホルチンも1945年5月からこの党に参加し、衛生宣伝処長に就任していた<sup>7)</sup>。つづいて9月29日に成立した「内モンゴル人民共和国臨時政府」の実行委員と内政部長に就任した。10月に西スニットでウランフーと出会い、「内モンゴル自治運動联合会」の組織副部長になった。1946年5月に「内モンゴル自治運動联合会」が衛生処を設置すると、ホルチンは衛生処処長に任命された。1947年5月「内モンゴル自治政府」が成立し、全政府域内の衛生行政を統括する責任者としてホルチンは民生部衛生局局長になった。衛生局の下には医政と薬政、予防と総務などの4科が設けられ、計35人のスタッフがいた。1948年5月2日に内モンゴル軍区衛生処が拡大して衛生部になると、同年、政府衛生局は軍区衛生部と合併し、軍区の主導下に入った。ホルチンは副部長に就任した。

ホルチンが内モンゴル衛生部副部長になった後に、モンゴル人民共和国の衛生部とも良好な関係を構築していた。1957年6月にモンゴル人民共和国の衛生代表団が内モンゴルを訪問し、翌1958年9月には中国衛生代表団訪もモンゴル人民共和国を訪問した。その中にホルチンもいた。モンゴル人民共和国訪問中には契約として同国に10床の療養用のベッドを提供した<sup>8)</sup>。

1959年に内モンゴルの衛生部は衛生庁に変わった。ホルチンは庁長で、党委書記も兼ねていた。モンゴル人の伝統医学を保存するため、有名なラマ医に徒弟をつけて、名医の技術を継承する制度を作り、1962年2月21日には正式に公文書でラマ医をモンゴル医と改称した<sup>9)</sup>。すべてはホルチンが主導した近代的な医療改革である。

ホルチン庁長は民主的な指導思想を以て内モンゴルの衛生医療業界をリードした。彼は党と政治が衛生医療事業に過剰に介入することに反対した。医療従事者の政治

<sup>5)</sup> 楊海英編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料—民族自決と民族問題』（7）風響社、2015年、1111-1112頁。

<sup>6)</sup> 楊海英編、前掲書、2015年、1112頁。

<sup>7)</sup> 楊海英編、前掲書、2015年、1112頁。

<sup>8)</sup> 楊海英編、前掲書、2015年、1117頁。

<sup>9)</sup> 胡斯力・鄭澤民『蒙医志略』遠方出版社、2007年、90頁。

参加は自由で強制すべきではないと主張し、衛生事業は人口繁栄を中心に、全面予防と病気の重点的撲滅といった政策を重視する政策をとっていた<sup>10)</sup>。

ホルチンの指導の下で、内モンゴ病院では科室主任責任制が導入され、科室の党支部を撤回した。そして、学術業績で評価するシステムの導入も試みていた。農村の衛生医療については、「三自一包」の政策を導入した。

ホルチンは衛生医療事業に対して、技術能力と学術成績をもっとも重視していた。私生活の中では、モンゴルの歴史と中国の古典と日本語の本をよく読んでいた。例えば、『蒙古踏破記』や『蒙古と西藏』、それに『蒙古大観』などの日本語の著作を愛読していた<sup>11)</sup>。

1951年7月1日は中国共産党建党30周年に当たる。ホルチンは政府系の『内蒙古日報』に文を掲載し、以下のように記している。

今日、共産党の誕生日を祝うことを私は光栄に思っている。内モンゴルの人々は幸せに暮らし、民族自治を実現できたのは共産党のおかげである。この共産党の誕生30周年を記念することには特別な意義がある。内モンゴルの人々は自分たちの人民政府を成立し、国家安全を守る武装部隊を所有し、遊牧民たちも牧地と牧畜を所有できており、労働の積極性も高まっている<sup>12)</sup>。

ホルチン氏は共産党の対内モンゴル統治にある程度満足していたようである。1951年の内モンゴルは人民政府が成立して4年間経つ。共産党の主導下に置かれていた内モンゴルでは騎兵などの武装部隊をも所有していたため、民族自治の実行状況はある程度ホルチンの望みとおりになっていたとも考えられる。

### 文化大革命中のホルチン

1968年の中国は文化大革命の真最中にあつた。1月15日に内モンゴル自治区政府の宣伝と教育関係の配下にあつた「直属機関魯迅兵団」と「衛生総部」、「内モンゴル衛生庁318兵団」が合同で「三反分子のホルチンを打倒せよ」との文章を公開した<sup>13)</sup>。

ホルチンはまた「日本のスパイ」として打倒された。その罪は、日本滞在中のホルチンは大蒙奸のハーフンガが作った反動組織の留日同郷会に加わり、日本のスパイで、鉄血団分子のデレゲルチョクトとも結託していたことであるとされた。1945

---

<sup>10)</sup> 楊海英編、2015年、前掲書、1123～1124頁。

<sup>11)</sup> 楊海英編、2015年、前掲書、1125頁。

<sup>12)</sup> 胡爾欽畢力格「没有中国共产党的领导就没有自由幸福的新内蒙古」『内蒙古日報』1951年7月1日。

<sup>13)</sup> 楊海英編、2015年、前掲書、106頁。

年にはさらにデレゲルチョクトを「ボス」とする「内モンゴル青年革命党」の党员となった。「内モンゴル青年革命党」の武装部長は日本陸軍士官学校を出たゴンブという尉官だった。ホルチンは自らの政治的な立場を利用して、自治区では日本のスパイであるデレゲルチョクトを庇いつづけ、彼を中医の通訳に任命していた、と批判文はいう。

ホルチンは大日本帝国から学んだ医術を使って、蒙奸と日本人に奉仕していた、とも批判された。1943年に日本が作成した『チンギス・ハーン』という映画の通訳を担当し、同年5月には「偽蒙疆政権」の医学代表団を率いて東京に行き、東亜医学会に参加して「反革命の活動」を展開した。ホルチンは常に医者白衣をまとうて、徳王と日本のために反革命の活動を進めてきた、と批判文は指摘する。

日本が敗退した1945年8月にホルチンは再び先頭に立って、モンゴル自治邦政権の高等裁判所所長のボインダライと、同政権駐日大使のテゲシボヤン、交通部長のムゲデンボー、経済部長のジャラガルらとともに「内モンゴル民族解放委員会」を組織した。

1959年から自治区の衛生庁の庁長兼党委員会書記となってから、ホルチンは「ウランフー王朝の衛生大臣」として、忠実に民族分裂の活動をすすめた。包正とイダガスレンらのような日本統治時代に育った知識人を大量に医学界に採用したのが、その証拠だ、と批判資料は主張している。

ホルチンはいつも日本語の『蒙古踏破記』や『蒙古と青蔵』を読んでいた。「ふだんから読んでいる本からもその反革命の本姓も分かるだろう」、と批判文は誇張する。

ホルチンは酷い気管炎と肺炎を罹っていたにもかかわらず漢人たちに病院から批判闘争大会に連行された。家族の証言によると、1968年に批判闘争大会で残忍な方法で殴られつづけ、帰宅してすぐに呼吸困難で亡くなったという<sup>14)</sup>。

### 3 ジュテークチ

ジュテークチもすでに先述したホルチンと同じ、日本から近代医学を学んだ医学者である。彼はジェリム盟のホルチン右翼中旗の出身である。当時内モンゴル東部のホルチン草原は日本が創った満洲国の領土となっていた。8歳のジュテークチは国民小学校に入った。その後、満洲国が作った興安軍官学校に進んだ。ノモンハン戦争の失敗を目撃したジュテークチは進路を考え直して医者を目指す決心をした。

---

<sup>14)</sup> 楊海英、2009年、前掲書、185～186頁。

日本側も彼が軍官学校から医学校に転校することを許可した<sup>15)</sup>。

日本が敗退後の1945年8月21日に、ジュテークチらは集団で中国共産党の軍隊に編入された。人民解放軍第四野戦軍団所属の「211医院」に編入され、軍医として内戦中の1948年に長春戦役と、1949年の天津戦役に加わり、いつも長時間の手術を担当させられた<sup>16)</sup>。漢人からは、前出の高海川と同様に、満洲国時代に育成された医者として「もっている技術は活用させるが、政治的には信用できない」、とみられていた<sup>17)</sup>。

人民解放軍第四野戦軍団「211医院」はハルビンにあった軍病院を引きついたのである。ジュテークチはモンゴル人ながら日本によって育成された医者として共産党に信用されなかったため、朝鮮戦場へ派遣される運命から逃れることができた。彼は1952年に内モンゴル自治区に帰って「内モンゴル医院」に落ち着いた。のちに内モンゴル医院の責任者になって運営に関わった。そして、自治区の最高責任者ウラーンフーの専属医者も務めていた。

文化大革命が始まるとすぐに「准右派」とされた、それでも医療技術が優れていたのでフフホトの内モンゴル医院に転勤し外科主任を務めた。1966年5月21日内モンゴル医院内にジュテークチを批判する壁新聞（大字報）が張り出された。6月28日に職務停止を命じられた。しかし、重病人が来たときは、相変わらずにジュテークチしか対応できなかった。6月29日に、内モンゴル自治区対外貿易科の二人の高官、呉雨天と孟明の手術を担当した<sup>18)</sup>。「功績を立てて、罪を洗おう」と言われた。7月12日にジュテークチは祖国を分裂させた内モンゴル人民革命党員、満洲国などで教育された日本のスパイ、修正主義国家モンゴル人民共和国のスパイ、ウラーンフーの走狗、偽物の共産党員、反右運動中には植民地で育成された人を採用したことなどが罪とされた。1967年3月4日、ジュテークチが共産党員になった21周年の記念日に「牛小屋」と呼ばれる当時の監禁施設に閉じ込まれた<sup>19)</sup>。

1969年5月22日に毛沢東は「5・22」指示をだした。内モンゴル自治区で行われている「内モンゴル人民革命党員を抉り出して肅清する運動はやや拡大してしまった」という内容だった。それを受けて346,000人もの逮捕、監禁されていたモンゴル人も少しずつ解放されるようになった。ジュテークチもその中の一員として10月に「牛小屋」から出されて、内モンゴル医院に戻り、「帯罪医」として働かされた<sup>20)</sup>。

「帯罪医」ジュテークチの病院への復帰を待っていたのは、暴力によって傷だらけ

---

<sup>15)</sup> 楊海英、『墓標なき草原（上）』岩波書店、2009年、前掲書、185～186頁。

<sup>16)</sup> 楊海英、2009年、前掲書、174～175頁。

<sup>17)</sup> 楊海英、2009年、前掲書、185～186頁。

<sup>18)</sup> 楊海英、2009年、前掲書、178頁。

<sup>19)</sup> 楊海英、2009年、前掲書、179～180頁。

<sup>20)</sup> 楊海英、2009年、前掲書、179～180頁。

になった無数のモンゴル人であった<sup>21)</sup>。生き延びたジュテークチは自分の医者という身分を生かして、何とかモンゴル人「犯人」たちを内モンゴルから逃がそうとした<sup>22)</sup>。

当時、重病者を内モンゴル以外の病院に転院させるには、三人の主任医師のサインが必要だった。病院中のモンゴル人医者たちの暗黙の協力の下で、ジュテークチはあらゆる手を使って自治区外へ転院させた。たとえば、イケジョー盟書記のポインバトは前立腺肥大で手術する必要があった。また、内モンゴル大学副書記党委員オーノスを上海の病院に転院させた。そのほか比較的安全なところへ回した患者は16,000人になる。ジュテークチの活躍は内モンゴル革命委員会に密告された。1972年7月18日から8月11日にかけて、内モンゴル自治区共産党拡大委員会がフフホト市内で開かれた。会議上ジュテークチは徐信（副書記）に名指しで「内モンゴルの文化大革命は大きな成果を得ることできた。しかし一握りのモンゴル人医者には民族主義的な感情がなお強く残っている」と批判された。それでも、ジュテークチはその活動を中断しようとしなかった。

ホルチンとジュテークチの二人に共通する点は日本から近代医学を学び、日本の敗退後には内モンゴルの衛生医療の近代化に大きく貢献し、医療の現場で重要な役割を果たしたことである。しかし、そうした努力は決して中国に許されることではなかったのだ、肅清されたのである。

#### 4 南モンゴルの衛生医療の実態

高海川やホルチン、それにジュテークチらによって構築された近代的な南モンゴルにおける衛生の実態はどうだったのであろうか。南モンゴルにおいて、1945年以前の医療衛生は主に西洋からの宣教師と日本、モンゴル人医者と中華民国の医師、それにモンゴルの伝統医学者（喇嘛医）などによって管理・運営されていた。

日本敗退後の1945年11月27日に、内モンゴル自治運動聯合会は「当面の事業方針の中の衛生医療」に関する方針を発表した。その中でウラーンフーは、衛生問題は大事の問題で、衛生問題はモンゴルの人口の繁栄に影響を与えることで、最も重視すべき課題である、といった主旨の発言をしている<sup>23)</sup>。

また、1947年4月24日に内モンゴル自治政府が成立する直前に開いた内モンゴル人民代表会議でも、ウラーンフーは「将来、党の重要な任務の一つは衛生医療事業であり、中でも医療衛生施設の大幅な改善、疾病による死亡を減らすことが大切だ」、

---

<sup>21)</sup> 楊海英、2009年、前掲書、180頁。

<sup>22)</sup> 楊海英、2009年、前掲書、182頁。

<sup>23)</sup> 烏蘭夫「内蒙古自治運動連合会目前工作方針」『烏蘭夫文選』上、中央文献出版社、1999年、7頁。



と指示している<sup>24)</sup>。衛生局局長のホルチンはまさにウラーンフーのこのような指示を受けて1947年からずっと腺ペストの撲滅に全力を注いできた。当時、夏になると、腺ペストは草原地帯で流行することもあった。ホルチンらの努力はウラーンフーに高く評価されていた<sup>25)</sup>。

1947年に内モンゴル自治政府が成立した後、すぐに巡廻防疫医療隊を設立した。各盟市も相次いで防疫隊を設置した。1950年代後半には更に各地に衛生防疫処と自治区直属の伝染病予防・治療処を設置すると共に、農村牧畜地に2万人程度の衛生員と助産員を育成して送った。

1947年に内モンゴル東部のフルンボイルと現在の赤峰市にあたりで腺ペストが流行し、腺ペストを罹った患者は2.9万人に昇った。そのうち1.9万人が命を落とした疫病であった<sup>26)</sup>。自治政府は伝染病の予防を重視し伝染病院を建設し、そして予防装置として鼠を消滅することと消毒などを重視した。3年間の予防管理を経て患者数と死亡数が明らかに減少した。全面予防、重点撲滅という方針の下で、各地で鼠を駆逐する運動を展開し、腺ペストの病因を明らかにして、適切な治療ができるようになった。それにストレプトマイシンという筋肉注射薬を使って、97.06%まで治癒した<sup>27)</sup>。

表1 腺ペストの予防効果

	1947年	1948年	1949年
発病比率	100%	10.7%	1.3%
死亡比率	100%	11.1%	1.2%

出典：郝維民『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社、1991年、48頁に基づいて筆者作成。

1947年に腺ペスト予防活動を開始前の発病率と死亡率を100%とすると1949年になると1.3%と1.2%まで下がり、明らかに改善されていたことが表1から読み取れる。

<sup>24)</sup> 烏蘭夫「在内蒙古人民代表会議上の政治報告」『烏蘭夫文選』上、中央文献出版社、1999年、58頁。

<sup>25)</sup> 前掲楊海英『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上) 岩波書店、2009年、185—186頁。

<sup>26)</sup> 郝維民『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社、1991年、48頁。

<sup>27)</sup> 内蒙古衛生庁編『内蒙古自治区志・衛生志』2007年。

表2 1957年から1965年までの人口増加率

民族別	人口増加数	人口増加率
モンゴル	32.9万人	29.5%
タウル	11,702人	48.2%
エベンキ	3013人	48.8%
オロチョン	323人	34%

出典：郝維民『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社、1991年、285頁に基づいて筆者作成。

1957年から1965年までの内モンゴルは相対的に安定した状況にあったため、民衆の経済生活などもある程度改善できていたと考えられる。同時に衛生医療環境の発展も人口増加につながり、内モンゴルの人口も増える傾向にあった<sup>28)</sup>。先述のホルチンやジュテークチらの運命から分かるように、文革の発動で内モンゴルの近代化は大きなダメージを受けたのである。

## 5 モンゴル人民共和国の衛生医療の一端

以上、南モンゴルこと内モンゴル自治区における医療衛生の発展の歴史を日本と関連づけて述べてきたが、同時代の北モンゴル、すなわちモンゴル人民共和国はどうだったのだろうか。南も北もどちらも「社会主義を建設」していた時代である以上、両者を簡単に比較する必要があるだろう。

モンゴル人民共和国では科学的で、先進的な医療が人民革命闘争期から始まり、そのいっそうの発展は革命と独立の重要な目標となっていた。1923年4月、人民政府は当時の可能性と条件にもとづき、医学と獣医学、衛生事業を担当する部局を内務省管轄下に設置し、保健局が設立された。ウランバートル市にはソビエトの熟練した医師を抱える近代的な診療所と療養所が設置された<sup>29)</sup>。

北モンゴルにおける近代衛生医療事業は開始早々から政策を設定して、母子の健康保護を重視していた。20世紀前半は世界中で新生児の死亡率が非常に高かった時期である。モンゴル人社会も人口減少の問題に悩まされながら解決の糸口を模索していた。そこで、人口減少を食い止められる唯一の方法として、近代西洋医学が導入された。モンゴル人民共和国も当時、近代衛生医療を国民に宣伝するために、『モンゴル人民共和国国民健康保健省衛生雑誌』（*Mongol arad ulus-un arad-un erigül-i*

<sup>28)</sup> 人口の増加は衛生医療環境の改善だけでなく、中国内地からの移民の要素もある。これについては、本稿では直接取りあげない。

<sup>29)</sup> モンゴル科学アカデミー歴史研究所編著、二木博史 今泉博 岡田和行訳、田中克彦監修『モンゴル史』1、2、恒文社、1988年、451～454頁。

*qamayalakü yajar-un ariyun cheber-i sakiku sedgöl*) という雑誌を6千冊も刊行していた。その雑誌の内容の第一部は母子の健康保健に関する内容であった<sup>30)</sup>。同誌はモンゴル国の新生児の死亡率が高い原因を以下の三点にまとめている。

- 一、科学的な文化知識の不足が原因で新生児の世話に過ちが多い。
- 二、貧しい生活で親の栄養不足が原因である。
- 三、新生児を昔ながらの方法や迷信的な方法で扱うのが問題である。

これらの諸問題を解決するために、国家政策として、1928年にウランバートル市に初めて母子相談所（保護センター）が開設され、1931年には同様の相談所がホブドとアルタンボラグ、バヤントゥメンにも設置された<sup>31)</sup>。母子相談所（保護センター）はまず、科学的な文化知識が足りない妊婦たちに対し、以下のような近代衛生医療の知識を教えなければならないとしている。

妊婦と赤ん坊に衛生知識を説明する。

便利で衛生的な環境を整えて、産婦の苦しみを減少する。

産院を多く建設し、専門医者を招く。

親に母乳と育児の知識を教える。

少年・児童の体調をよく観察・管理する。

また貧しい生活で親の栄養不足などが原因で新生児の死亡をもたらしていることに対して、以下のような「母子の家」という施設を開設した<sup>32)</sup>。

出産前と出産後にそれぞれ一ヶ月半から二ヶ月まで「母子の家」での滞在を許可する。

仕事する女性たちが安心して出かける環境を整え、1929年には幼児の養育のためにウランバートルにベッド数20あまりの初の保育園を設置した<sup>33)</sup>。

最後に、迷信から切り離なして、近代医学を利用できるよう小児診療室も建設した。1929年にベッド数15床だったが、1940年には60床になった。

母子の健康管理のために「母親が自分と子供の健康を十分に管理できる条件をつくり、日常生活を科学的かつ快適な状態にする。母親があらゆる病気から自分と子供を守る習慣や知識を身に付けることが肝要であった」、との施策である。わずか一

---

<sup>30)</sup> モンゴル人民共和国衛生保健局『衛生雑誌』モンゴル国、19年（1930）、4～6頁。

<sup>31)</sup> モンゴル科学アカデミー歴史研究所編著、前掲書、451～454頁。

<sup>32)</sup> モンゴル人民共和国衛生保健局『衛生保健』モンゴル国、19年（1930）、11～12頁。

<sup>33)</sup> モンゴル科学アカデミー歴史研究所編著、前掲書、451～454頁。

例であるが、1950年代末のモンゴル国の衛生医療の政策について、『衛生雑誌』の目次（表3）からも読み取れよう。

表3 『衛生雑誌』の1～3号の目次

第一号	第二号	第三号
1、医療発展の状況と新しい課題	1、モンゴル人民共和国における医療衛生発展史	1、若者たちへの言葉
2、女性労働者の衛生状況	2、狂犬病の予防と治療	2、白血病の治療について
3、ウランバートルの衛生状況	3、Cüliherという植物の医学的利用について	3、出血の治療について
4、モンゴル高原の自然環境	4、医者教育について	4、Surbeg (Antibakterial) どう薬の使い方
5、児童の肺病と治療	5、薬の中毒予防について、薬の正しい使い方	5、病死者の扱い方
6、献血の意義	6、児童の耳病について	6、郡（ソム）の医者たちの役割
7、出産のしくみ	7、肺病について	7、医者的一天
8、病気になる体づくり	8、タバコの害について	8、子供を産むための準備
9、正しい温泉入浴（湯治）	9、アルコール中毒者の治療について	9、快適な住まいの作り方
10、野生動物と家畜から感染しない方法	10、酒とタバコは健康の敵	10、新しい医学用語のモンゴル語への翻訳について
11、ガンも治せる政府医療	11、たゆまず努力する医学者SengeとShagja	11、ソ連の医学者A.I.Kartamishibinの『皮膚病と性病』という本の翻訳について
12、71歳になったDandinさんの健康維持方法	12、ソ連における医療発展	12、胃病の各種名称について
13、優秀医学者の紹介		
14、ソ連の医学者 Mikrobiologch Nikolai Fedorovich の貢献		
15、チェコスロバキアの現状ルポ		

表3は、1959年にモンゴル人民共和国で出版された『衛生雑誌』の最初の三号に載った文章のタイトルであり、モンゴル人民共和国の衛生事業は主にどのようなことに注目していたかが分かる資料である。当時、主に医者と日常生活の中の衛生医療と専門病気の治療についてもっとも多く宣伝している。例えば、医者に関する文は「優秀医学者の紹介」や「ソ連の医学者 Mikrobiologch Nikolai Fedorovich の貢献」、「医者教育について」、「郡（ソム）の医者たちの役割」、「医者的一天」、「たゆまず努力する医学者 Senge と Shagja」などが見られる。日常生活の中の衛生保護に関しては「ウランバートルの衛生状況」と「病気になる体づくり」、「女性労働者の衛生状況」、「正しい温泉入浴」、「野生動物と家畜から感染しない方法」、「タバコの害について」、「酒とタバコは健康の敵」、「病死者の扱い方」などを宣伝していた。専門医療については「児童の肺病と治療」、「ガンも治せる政府医療」、「狂犬病の予防と治療」、「薬の中毒予防について、薬の正しい使い方」、「児童の耳病について」、「肺病について」、「アルコール中毒者の治療について」、「白血病の治療について」、「出血の治療について」、「出産の準備」などの内容に注目していた。

すでに簡単に触れたように、南モンゴルの医療衛生の責任者のホルチンはモンゴル人民共和国を訪問し、積極的な交流を行っていた。どちらも「社会主義を建設」していた時代であり、直接ソ連から学んでいたモンゴル人民共和国の成功した経験も多く南モンゴルに導入された。しかし、こうした建設的な学術交流も文革中は「民

族分裂的な活動」だとされて、断罪されたのである。

## 6 おわりに

1944年頃から、日本の敗戦は時間の問題だ、とモンゴル人たちはある程度予測できていた。そのため、モンゴル人の民族自決を実現するためには何とかしなければならぬと思う人々も多かった<sup>34)</sup>。

モンゴル人の有職者たちは、南北モンゴルの統一合併を強く望んでいた。しかし、大国同士で勝手に結んだ「ヤルタ協定」はモンゴル人の希望を葬りさったため、南モンゴルのモンゴル人たちは中国共産党との接触を余儀なくされた。小論で取り上げた高海川やホルチン、それにジュテークチのような日本的な知識を身に付けた知識人たちは内モンゴル自治区の衛生庁のトップとなった人物である。文化大革命中には共に「民族分裂主義者」や「日本のスパイ」という罪で殺害されるか、重傷を負わされた。彼らの経歴から分かることは、中華人民共和国の一自治区となった南モンゴルにおいて、モンゴル人たちは日本から学んだ医学知識を活用して民族の近代化を実現しようと努力しつづけたが、文革中に断罪され、はかなく頓挫してしまった事実である。対照的なのは、同時代のモンゴル人民共和国はソ連の指導の下で、飛躍的な発展を遂げていた。南北が異なる運命を辿った結果である。

---

<sup>34)</sup> ハンギン・ゴンボジャブ（談）磯野富子（記録）「日本の敗戦と徳王」『シルクロード』1977年7号、17頁。